高度の蔓延国であったことが広く認められていた．このことを，大森弘喜著の『フランス公衆衛生史』が環境衛生の面から活写していることを以前本雑誌で紹介したことがある．併せて読まれることをすすめたい．最後に「おわりに」の中で『われわれは，「衛生」を両義的なものとしてみなければならない．一方では「避けうる病」を減少させ，「命を救うものとしての衛生」であり，他方では，人間を「種」や「人口の一部」として認識し，それを管理し，改良しようとする「統治としての衛生である」』『感染症対策が二つの面を持つことを確認した．それは命を救うものである一方で，感染症の脅威を口実として人間の統治を可能にするものであった．したがって，われわれは「統治としての衛生」に陥ることなく，「避けうる病」を減少させるという難しい仕事を行わなければならない．そのためには，恐怖を目の前にしても，それが何のためであり，どのくらい必要で，ほかに良い選択肢がないのかと，合理的に考える努力をしなければならないのである』と永遠の課題で結んでいる．

都市封鎖や国境を閉じることが突然に起こった今年，本書によればヨーロッパ社会の中で感染症による都市の封鎖は歴史的には少ないものでなかったことを理解できる．社会を律する法の問題を統計として現わす合理性の歴史を読んだときに，日本ではそれが身近なものでないと感ずるのは評者だけではないと思う．本書を本学会誌にて紹介しておくことが必要と考え，著者の研究が二十世紀の結核そしてインフルエンザ以降についてもなされ発表されることを期待したい．

（渡部　幹夫）

［新曜社，〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-9，TEL. 03（3264）4973，2018年8月，A5判，387頁，3,600円＋税］

町泉寿郎 編
『講座 近代日本と漢学 第3巻　漢学と医学』

本書は，「漢学」から日本の近代化の特色や問題点を探ることを目的とした『講座近代日本と漢学』シリーズの第3巻で，漢学と医学の関係性に焦点を当てている．本書は以下の通り，12の論文と4つのコラムより成り立つ．①～⑯の番号は，評者が便宜的に付与した．

第Ⅰ部　近世近代の「学び」
- ①第1章　近世日本社会における医学の「学び」（町泉寿郎）
- ②第2章　華岡流外科の普及と近代医学（梶谷光弘）
- ③第3章　江戸時代の経穴学にみる考証と折衷――小坂元祐と山崎宗運を事例に（加畑聡子）
- ④研究の窓　女訓書と医学知識啓蒙（ヤング，W・エヴァン）

第Ⅱ部　西洋医学知識の普及
- ⑤第1章　18世紀から19世紀のヨーロッパにおける医学の変革，日本との関わり（坂井建雄）
- ⑥第2章　舶載医学蘭書小考（吉田忠）
- ⑦第3章　ベンジャミン・ホブソン著『全體新論』の持つ意味（中村聡）
- ⑧研究の窓　福沢諭吉の科学啓蒙（武田時昌）

第Ⅲ部　医学医療文化史
- ⑨第1章　江戸時代の和算塾の様相（佐藤賢一）
- ⑩第2章　医者と漢詩文――江戸後期から明治期を中心に（合山林太郎）
- ⑪第3章　近世後期における地方医家の学問修業――吉益塾に学んだ人々から（清水信子）
- ⑫研究の窓　清医と幕府医官の筆談について――清医胡兆新『問答』『筆語』（郭秀梅）

第Ⅳ部　医学医療制度
- ⑬第1章　宗伯と漢方存続運動（渡辺浩二）
- ⑭第2章　医学校の近代化――岡山藩医学館

（松村紀明）
⑮第3章　近代日本薬学の形成（小曽戸洋）
⑯研究の窓　満州医科大学について（川邉雄大）

第Ⅰ部では，近世日本を中心に医学を学ぶ環境や医学書の内容について主に取り上げている．①では，印刷技術の進展に伴う医学書の普及により，医学知識習得の需要が高まり，各地の私塾や医学館（幕府が運営）で，医学書を用いた講義が行われたことを指摘している．②では，華岡青洲が創製した全身麻酔薬による手術の詳細に注目するとともに，華岡流外科が多くの門人に伝えられ，近代医学への契機となったことが述べられている．③では，19世紀前後の経穴学における考証医学の内容について，医師の著作を分析し，鍼灸理論の根拠が古医書や解剖知識にあったことを明らかにしている．④では，女訓書（女性向けの道徳的な教えを重視した教訓書）の記述から，近世中期以降，医学知識を備えていることを理想とする女性像が構築されたことを指摘している．

第Ⅱ部では，西洋の医学知識，医学書が日本に導入された過程を中心に考察している．⑤では，18世紀前半からヨーロッパの大学の医学教育において，生理学の比重が大きくなったこと，多くのヨーロッパの医学書がオランダ語に訳され，日本にもたらされたことを指摘している．⑥では，新刊の西洋医学書の輸入を求める声が日本国内であったことや，幕末期になると輸入された西洋医学書の数が増えたことを述べている．⑦では，ホブソン著『全體新論』は，西洋医学書だけでなく，キリスト教の布教書という性格も持つこと，仏僧はキリスト教の浸透を防ぐために同書の内容に注意を促していたことを指摘している．⑧では，福澤諭吉著『西洋事情』の内容に注目し，福澤が特に蒸気と電気を重要視していたことを明らかにしている．

第Ⅲ部では，医学や算学など諸学問の修学過程に焦点を当てている．⑨では，和算塾では，習熟度に応じて門人を幾つかの段階に区分していたこと，近世後期に和算家が算術の問題と解答を絵馬に仕立てて寺社に奉納していたことを明らかにしている．⑩では，漢方医，蘭方医といった区分に関係なく，漢詩文を作成する能力は医師として必要不可欠であったことを指摘している．⑪では，地方から京都に遊学した医師は，書物収集のため私塾の師匠や同門の蔵書を書写していたことや，複数の医学塾に通っていたことを明らかにしている．⑫では，19世紀初頭に訪日した清国医師と幕府医官とのやり取りを記した書籍を取り上げて，幕府医官が熱心に，中国医学に関する知識を清国医師に尋ねたことを明らかにしている．

第Ⅳ部では，幕末期以降の漢方医学や薬学の位置づけについて考察している．⑬では，幕末維新期の漢方医浅田宗伯が漢方医の医術開業を認めてもらうために，政府への請願や治療効果の宣伝を行っていたことを指摘している．⑭では，明治3（1870）年に創設された岡山藩医学館において，当初は漢方医学と蘭方医学の並立が模索されていたこと，民間医の教育機関としても医学館が機能していたことを明らかにしている．⑮では，近代薬学の進展に貢献した薬学者の事績を紹介するとともに，調剤権をめぐる医師と薬剤師の対立にも言及している．⑯では，20世紀前半に設立された満州医科大学の活動や，同大学教授岡西為人の古医書蒐集について言及している．

以上が本書の内容である．本書の成果の一つは，近世日本の医師に漢学の知識は必須であること，幕末期においても漢方医学と蘭方医学が併存していたことを実証的に明らかにしたことであろう．編者の町氏は，「あとがき」において，近代化の過程において漢学と洋学を補完的に捉えるための一つの試みとして本書を位置づけているが，その試みは成功しているといえる．一方，編著という性質上，各部，各章同士の関係性が明確でない部分があったが，本書の成果に比べれば些細なことである．多くの方々に読まれることを願う．

（萱田　寛也）

［戎光祥出版，〒102-0083 東京都千代田区麹町1-7 相互半蔵門ビル8階，TEL. 03（5275）3361，2020年2月，A5判，284頁，3,000円＋税］